

【表現学関連分野の研究動向】

認知言語学

有菌 智美

2019年は、日本認知言語学会の設立20周年にあたり、第20回記念大会が開催された。またそれと連続して、我が国で初めて国際認知言語学会（第15回大会）が開催された。このことは、理論面の深化とそれを可能にする実証研究の興隆に支えられ、我が国においても認知言語学が着実に発展してきたことの表れであろう。さらにこのことを象徴するように、本年は、辻幸夫（主編）の『認知言語学大事典』（朝倉書房）が出版された。事典や概説書としては、辻幸夫（編）（2013）『新編認知言語学キーワード事典』（研究社）や、高橋英光・野村益寛・森雄一（編）（2018）『認知言語学とは何か—あの先生に聞いてみよう』（くろしお出版）などの良書が出版されているが、本書はさらに、第1章～第4章で、認知言語学の成立とこれまでの流れ、理論的枠組み、主要概念、理論的問題について、当該分野の第一線の研究者が最新の知見に基づき丁寧な解説を行っている。また第5章では、心理学、人類学、神経科学、脳機能計測、社会言語学、自然言語処理、手話などの他領域について、各領域から認知言語学が何を吸収するかという観点からだけでなく、それらの領域に対して認知言語学がどのように貢献しうるかという観点でもまとめられている。

また、山梨正明（2019）『日・英語の発想と論理—認知モードの対照分析—』（開拓社）では、多様なスタイルとジャンルのテキストを対象とし、それらの形

式・意味・機能について、認知能力に基づく日・英語の発想の違いを明らかにしている。特に第6章では、翻訳プロセスにおける誤訳・難解訳の言語事例の比較を通して両言語の発想の違いを明らかにし、また文学作品における直訳的文体・翻訳的文体について考察し、それらの特徴付ける修辭的技巧についても論じている。このように翻訳に関わる認知プロセスおよびある種の文体を支える修辭的技巧を扱うことにより、文学言語に関連する諸分野（言語文化論、比較文体論、翻訳論等）へと新しい洞察をもたらす。

さらに、成蹊大学アジア太平洋研究センター共同研究プロジェクト「認知言語学の新領域開拓研究—英語・日本語・アジア諸語を中心として—」（2015年度から2017年度、研究代表者：森雄一）における研究成果がまとめられたのが、森雄一・西村義樹・長谷川明香（編）（2019）の『認知言語学を紡ぐ』と『認知言語学を拓く』（くろしお出版）の二冊である。いずれも認知言語学のこれまでの研究成果を活かしつつ新たな展開を目指すものであり、特に『認知言語学を拓く』は、フィールド言語学（第1部）、中国語研究（第2部）、語用論（第3部）、言語変化（第4部）といった、認知言語学外部からの刺激を得て、認知言語学研究のさらなる展開に寄与するものである。

以上のように、2019年は今まで以上に外との接点を強くする動きが見られた。今後さらに学際的研究が重ねられることにより、認知言語学研究の根本を問い直すと同時に、認知言語学の新たな可能性が拓けることになろう。

（名古屋学院大学）